

気質が「熱い」、塩竈の人々に惹かれて

フジカラープラザ岩沼さくら店・大友写真館 大友 文雄さん

震災後、家の事情で岩沼に事務所を移しましたが、本当は塩竈で商売を再開するつもりでした。今でも塩竈から仕事の依頼をいただいて、週に一度は撮影に訪れています。

岩沼も塩竈も歴史がある大きな神社の門前町ですが、人の「気質」が全然違うのです。塩竈の人というのは、人と人とのつながりがとても強くて、しかも「熱い」のです。他の地域の人より、ギュッと「濃縮」されているようなね。一度付き合いが始まると、そこからずーっと変わらずに、その関係を大切にしてくださるんです。若いお母さんにしてもね、最初は幼稚園の子を連れてくるのですが、その子が、小学校、中学校・・・と、大



奥さんの育てた花に囲まれた、新しく開いた写真館



プロフィール

東京の写真現像所で現像技師として長年の勤務の後、平成20年に独立。塩竈市内に写真館を開業しました。「ネガからすべての色を予測する」のが仕事だったキャリア40年以上の大友さん。「最近はやっと落ち着いたので、また撮影旅行に行きたいですね」と話しました。

飾られた大友さんの写真が、お客様を迎えています



りや、お客さんや子どもたちの姿とか、いろいろな思い出がよみがえるのです。津波でだいぶまちの様子が変わってしまいました。これからは、塩竈の人たちの写真を撮影していきたいですね。

きくなる
様子が写
真を通し
て分かる
のです
よ。今も
塩竈のま
ちを歩く
と、商店
街のお祭

売れる品物は、人々の「心」を映す

市川紙店 市川 弘子さん

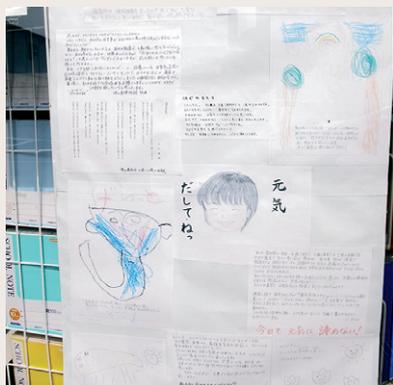
津波によって店舗が浸水したことで、商品すべてが湿気を含み、売り物にならなくなりました。しかし、その「紙」の一枚一枚も、職人さんが丹精を込めて作ったもの。無駄にはできないと思い、店先に置いて必要な方にお持ちいただきました。寒かったですから、「障子紙」などはすぐに無くなりました。

この商売をしていると、皆さんの心境が、時間とともに変わっていくのが分かります。片付けの最中にいらした最初のお客様は、津波で旦那様を亡くされ、お布施袋が欲しいという方でした。まちの片付けが始まると、紐やガムテープが、それからしばらくすると、「部屋を借りたので、『契約書』が欲しい」という方が来ました。震災から1年がたつと、お

被災後の店舗の様子。ガラスには何度も押し寄せた津波の跡が残っています



札の手紙を書いたための便箋や封筒が、例年の何倍も出ました。そして最近では趣味の「ものづくり」に使う和紙や、絵を描く色紙が欲しいという方が増えました。私たちの商売は「人の心のゆとり」が見える商売なのだ、変わりゆく街並みを見つめながら感じています。



塩竈を訪れたボランティアから、今も多くの手紙が届きます



プロフィール

明治35年創業の市川紙店は市川弘子さんが3代目。門前町塩竈で100年以上にわたって、人々の生活を支えてきました。四国や京都の紙問屋や職人も長年の取引を重ねる老舗です。震災後はカメラマンである息子さんが撮影した塩竈の写真を店頭に表示してきました。

浅海漁業の再生・復興につなげたい

「共栄丸水産」宮城県漁業協同組合・塩釜市第一支所の前運営委員長 水間 正夫さん

平成22年2月のチリ中部沿岸地震と、翌年の東日本大震災の大津波と、私たち養殖漁民は、2年続けて養殖施設を失う被害に遭いました。しかし、昨年になってやっと『三陸産』にも負けない品質のワカメが収穫できました。時間がかかっただけに、本当にうれしかったですね。

震災後は「しおがま・みなと復興市場」にお店を構え、さまざまな地域の方々と接する機会を得ることができました。お客様に直接自分たちの生産物を紹介する機会が増え、着実に商品が広がってゆくことを実感しました。漁協に所属する私たちには、他地域に負けない品質の商品を生産し、全国へPRする務めがあると思っています。そのために、家族や仲間



右上が東日本大震災による店舗の被害。それ以外はチリ中部沿岸地震（M8.8）による養殖棚の被害



袋の裏面にはこのワカメを作るに至った経緯と生産者の写真を載せています

と共に力を合わせて、今まで一所懸命に知恵を絞ってきました。

塩竈湾の養殖漁民である私たちが、地道な努力を続けることで、衰退してきた塩竈の浅海漁業の再生・復興につなげたい。漁業を魅力あるものになれば、塩竈が再び活気を取り戻すと信じています。



プロフィール

昭和25年、水間さんの祖父が塩竈湾で海苔の養殖を開始。その後、水間さんが養殖品目をワカメと昆布に絞り、養殖技術の開発に努めてきました。水間さんは平成26年6月まで、宮城県漁業協同組合・塩釜市第一支所の運営委員長として、漁業の復興に取り組んできました。

お客さんに「勇気」をいただく日々

「しおがま・みなと復興市場」佐藤鮮魚店 佐藤 秀治さん

両親が始めた「塩釜海岸中央鮮魚市場」の鮮魚店で働きだして、魚一筋で50年です。

仮設店舗ができるまで、お客さんから商品の注文があれば、お客さんが離れてしまわないように、何とかして手に入れて発送していました。車での移動販売も行いました。

今は「しおがま・みなと復興市場」で営業していますが、一度来たお客さんが、応援したいと言って、また来てくださいます。本当にありがたいことです。

ここに来てよかったのは、毎日、お客さんに会えるということですね。お客さんにはたくさん「勇気」をいただいで



休日の「しおがま・みなと復興市場」の様子



「これからも、みんなと一緒に頑張っていきますよ」

きました。私が健康に働かせていただけるのも、そんなお客さんからの励みがあるからです。

被災した商店にとって大切なのは、これからです。営業を続ける場所があれば、私もまだまだ頑張るつもりです。私たちが「復興」を進めるためには、やらなければならないことが、いっぱいありますからね。



プロフィール

戦後間もなく佐藤さんのご両親がはじめた鮮魚店。佐藤さんは高校生から手伝いに入り、昭和35年のチリ地震津波もお店で経験しています。

歴史的建造物を、「まちの記憶装置」として

「特定非営利活動法人 NPO みなとしほがま」 副理事長 高橋 幸三郎さん

私たちは平成15年の発足以来、塩竈の文化財の調査と、それらを活かしたまちづくりを行ってきました。もともと塩竈は長い歴史を象徴する歴史的建造物が多いためとして知られていましたが、東日本大震災の発生により、残念なことに、その多くが取り壊されました。持ち主の多くは、当初保存を望んでいましたが、老朽化が進んでいた建物の被害は大きく、悩んだ末に「泣く泣く取り壊した」というのが実情です。

そのような中で、御釜神社の門前に建つ、明治初頭建造の「旧えびや旅館」の保存活用に道が残せたことは、私たちにとても大きな喜びでした。えびや旅館は、塩竈大火の後まもなく建造され、明治三



「旧えびや旅館」の建物で震災前まで営業していた「松亀園茶舗」。木造3階建てであることが分かります (写真提供: NPO みなとしほがま)



月に一度の「お掃除会」の後の「車座会議」。さまざまな活用アイデアも出されます (写真提供: NPO みなとしほがま)

陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波、そして東日本大震災と、4度にわたる震災と津波を乗り越えてきた建物です。今後の塩竈観光の新たな拠点として、復興を目指す「市民力の象徴」として、また「まちの歴史を物語る貴重な市民の財産」として活用する予定です。



プロフィール

「特定非営利活動法人 NPO みなとしほがま」は、塩竈の地域活性化を目的に、平成15年12月に発足。歴史的建造物の保存活用をはじめとして、市内の観光ガイドなど、地域資源の発掘や活用、情報発信などのまちづくりに取り組んでいます。

塩竈の「宝島」を、全国の人々へ紹介

NPO High Five 畑中 みゆきさん

ふるさとへの郷土愛から、震災翌年の2012年に立ち上げたのが、NPO High Fiveです。復興支援のためだけではなく、「まちづくりや地域おこしに、私自身も携わりたい」という思いから始まりました。

現在は塩竈市とともに「離島振興」や「食振興事業」に取り組んでいます。その一環として、2012年から桂島の特産品である海苔のPRイベント、「のりフェスティバル」を開催しています。また、「キッチンカー」で全国のイベント会場を回るのも大切な仕事です。

浦戸諸島には、美しい海、島特有の時間の流れがあり、そこには、美味しい食材や料理があります。また、シーカヤッ



1,500人が来場した、2013年の「のりフェスティバル」

菜の花畑を作るために、荒れ地を耕します



クや地引網も体験できる。天然の宝庫 URATOTAKARASIMAです。それを、フル活用したいですね。

2013年からは「塩竈浦戸菜の花プロジェクト」も始まり、今は菜の花畑を作る地道な作業が続きます。多くの観光客がまた塩竈を訪れることを励みに、これからもがんばります。



プロフィール

フリースタイル・スキーの日本代表として、ソルトレイク(2002年)、トリノ(2006年)と、2回の冬季オリンピックに連続出場を果たした畑中みゆきさん。当初は個人で支援活動を行っていた畑中さんが、活動の継続を目的に設立したのが「NPO High Five」です。

塩竈を支える、ラジオの力

エフエムベイエリア株式会社 専務取締役 横田 善光さん

「宮城県沖地震」に備え、1997年に塩竈市のコミュニティFMとして開局したのが「ベイウェーブ」です。震災ではスタジオが津波の被害を受けましたが、塩竈市役所に臨時災害局を開局して放送を継続。以後2年半にわたり、生活に密着した放送を行いました。

津波によって放送を中断した経験から、震災後は放送システムを強化し、高台の塩釜ガス体育館に新送信所を建設しました。出力も震災前の2倍に増力したことで、浦戸諸島も含めた塩竈市全域での受信が可能になりました。非常時には行政の防災無線がFM放送に「割り込む」など、安心安全にも貢献できる体制が整いました。

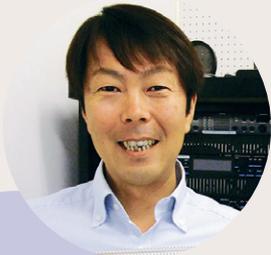


市役所に設置された「しおがまさいがエフエム」のスタジオ



高台にある塩釜ガス体育館に建設された新アンテナ

地域に密着した放送局の役割として大切に行っているのは、そこに暮らす人々の生活を「ケア」するということ。臨時災害局の運用を終えた今でも、被災者の視点での番組作りを心掛けています。また私たちの経験を伝え、「減災」につながるため、全国各地に向向いての講演にも力を入れています。



プロフィール

FM ベイウェーブは、1995年に発生した阪神淡路大震災を教訓に、宮城県沖地震に備えて開局した塩竈・松島をエリアとするラジオ局です。震災1週間後には臨時災害局「しおがまさいがエフエム」を開局し、役目を終える2013年9月まで被災地に密着した情報を流し続けました。

コミュニティ放送だからこそその番組制作を

宮城ケーブルテレビ株式会社 事業統括部長代理 八木 伸太郎さん

今回の震災では、津波による本社の浸水被害や、沿岸エリアで受信契約されている多くのお客様が被災されるなど、事前の想定を超える大きな被害が発生しました。

震災後の番組作りでは、復興に関連する情報の紹介などに注力し、平成25年は1年間にわたって塩竈市の観光PRビデオを制作。ケーブルテレビのネットワーク網を活用して全国へ配信するなど、コミュニティ放送局として、塩竈をはじめとした沿岸市町村の「今」の姿と、その地域の魅力の発信に力を入れています。

ハード面では、震災で放送が中断した教訓を生かして、従来の緊急放送に加え、情報提供手段の「2重化」を検討しています。その一つが、「防災定点カメラ」



全国のケーブルテレビから提供される燃料で放送を続けました



復興の現場からのレポートに力を入れています

の設置や、有事の際に誰もが情報を入力できる「WiFiスポット」等の導入で、現在もその有効性の検討を重ねています。

「今私たちにできることは何なのか」。震災直後に繰り返したその問いを、これからも自身に問いかけながら復興に寄与していきたいと思っています。



プロフィール

宮城ケーブルテレビは1992年に開局した第三セクター方式のケーブルテレビ局で、塩竈市、利府町、七ヶ浜町、多賀城市を中心に放送網を持っています。

99%の耕作放棄地から、「新しい農業」を

NPO 法人浦戸アイランド倶楽部 理事長 大津 晃一さん

私たちが活動の拠点としている寒風沢島は、仙台の中心部から、電車と市営汽船を乗りついで1時間ちよつと。手つかずの自然がそっくり残り、人々が『自給自足』をする島です。私たちはそこで、将来の島への新たな定住者を支援するため、経済的に自立可能で、かつ環境に負荷を掛けない持続可能な農業の形を模索しています。

浦戸諸島は、島の暮らし方の中に、「田舎暮らし」や「農山漁村」「食の安全性」など、社会的に注目されるテーマがたくさん詰まっている魅力ある島々。それらの「資源」を活用し、『東北の被災地の小さな島でも、人はちゃんと生活できている』ことが発信できれば、過疎や後継



手つかずの自然に囲まれ、田植えを待つ、再生した水田



酒蔵「(株)佐浦」へ販売され、「純米吟醸酒 寒風沢」が作られています

者問題など、同様の課題を抱える地域や人々に対しても、大きな勇気や希望になると考えます。

本場の「復興」は、そこに人が入り、産業が元の状況以上になること。被災地のみならず、日本の「地域」の再生にも貢献したいですね。



プロフィール

平成19年に発足した「浦戸アイランド倶楽部」。以来、地元の産業界や行政、そして市民と共に議論を重ね、「自然環境と共生した島づくり」と「地域社会との連携による持続可能社会の実現」に取り組んできました。塩竈市と共に、浦戸諸島での「離島振興」に取り組んでいます。

「復興の象徴」である地酒。その蔵元として

株式会社佐浦 代表取締役社長 佐浦 弘一さん(13代目当主)

本社蔵の位置する塩竈市では震度6強の揺れと、津波による浸水被害が発生し、土蔵の外壁の崩落や各種設備の損壊、商品である約3万本のお酒の破損・被災がありました。吟醸造りの最盛期であった酒造りについても、その継続を断念し、建物と施設の修繕に努めざるを得ませんでした。その結果、本社蔵については2011年6月1日より瓶詰め業務を再開することができました。その後も復旧を徐々に進め、今年の出荷総数は、被災前年の1年間と比較しても、ほぼ同等数にまで回復することができました。

東北各地にあった蔵元の多くが被災し、その再開が地域の「復興の象徴」になっています。290年にわたって塩竈と密接に関わりながら商売をして



2011年の大吟醸浦霞のラベルは、修理が進む享保蔵の姿がデザインされています

きてきた私たちにとっても、「地域の発展」は当社の発展にも不可欠です。塩竈の皆さんと協力し、「私たちにできること」に取り組むことで、塩竈の復興に貢献することが私たちの役割だと思っています。



プロフィール

株式会社佐浦は享保9年(1724年)創業。以来1000年以上の歴史を持つ鹽竈神社の御神酒屋として酒を醸し続けてきました。塩竈市の本社蔵と、平成6年に東松島市に新造した矢本蔵で酒造りを行っています。



2012年の「希望の夜明け」では、修理が終わった享保蔵が描かれています

多くの教訓から、「垣根」を越えた体制作りを

公益財団法人宮城厚生協会 坂総合病院 事務局長 佐藤 孝一さん



3月11日 (写真提供: 坂総合病院)

「坂総合病院は「地域医療支援病院」と合わせ、「災害拠点病院」にも認定される病院です。大規模災害医療を想定した訓練を繰り返し、東日本大震災では、救急搬送されたすべての患者を受け入れました。

大規模災害では、患者数が一気に膨れ上がり、受け皿である医療機関とのバランスが崩れます。その対策には、当事者である医療機関のみならず、市町村や県といった行政機関も一体となって、体制を整備することが何より重要です。活かすべき数多くの教訓が、先の震災によって蓄積されています。

震災で気付かされたことに、「その瞬間間で、被災した皆さんが必要としていることが違う」ということがあります。



プロフィール

大正元年(1912年)に私立塩釜病院として創立。現在は塩竈市を中心とする2市3町および仙台市東部を含める人口25万人を診療圏とし、地域医療の中核を担っています。震災から1カ月間に14,000名の外来診療を行い、避難所で4,300人の診察を行いました。

近隣避難所への訪問前の朝の打ち合わせ (写真提供: 坂総合病院)



医療は、その分野に過ぎません。現在は震災の時より、さまざまな問題が顕在化しにくくなっており、私たちはそれを感じ取らなくてはなりません。これから必要なのは、孤独死や関連死などを防ぐために、いかに一人ひとりに光を当てて「支える」体制を作るのかということです。

いかなる状況でも、ライフラインを守り抜く

塩釜ガス株式会社 常務取締役 坂本 久さん



日本ガス協会の災害復旧支援。導管修繕隊の大阪ガスの皆さん

当社では宮城県沖地震への備えとして、有事の際に供給停止区域を最小限に限定する「ブロック化」の整備や、耐震性の高いガス管への入れ替えを計画的に行っていました。その対策が功を奏し、東日本大震災の地震による被害は極めて軽微なものでした。しかし一方で、当社へのガスの供給元である仙台市ガス局の港工場が津波で甚大な被害を受けたため、私たちが断腸の思いで都市ガスの供給を停止しました。

その後、仙台市ガス局は新潟県からのパイプラインによってガスの供給を再開したため、当社でも津波被害区域を除き4月12日までに復旧が完了しました。

「いかなる状況においてもライフラインを守り抜く」。震災の教訓を胸に、当



プロフィール

昭和5年(1930年)に設立され、塩竈市を中心に多賀城市や七ヶ浜町、利府町で、都市ガス事業、簡易ガス事業およびプロパンガス販売などの各種サービスを提供しています。平成22年には創立80周年を迎え、地域発展に貢献する目的から塩竈市体育館のネーミングライツを取得、「塩釜ガス体育館」と命名されました。



赤石病院様の移動式ガス発生設備の設置例。医療施設等への臨時ガス供給を行った時のものです

社もガスの受け入れルートを二重化するなど、さらなる安定供給の体制を整えました。こうした私たちのリスク回避の取組は、全国のガス事業者へと広がっています。これからも地域に密着した企業として、塩竈の方々にも頼られ、さまざまなご要望に応えられる会社でありたいですね。

碧南市から塩竈市へ。必要とされる企業を目指して

スギ製菓株式会社 経営管理部総務経理課課長 稲垣 雅之さん

私たちは、愛知県碧南市でエビやイカ、タコなどの海産物を使った海鮮せんべいの製造販売を行っています。

震災後は社長や社員もボランティアとして宮城県沿岸部を訪れていました。「会社としても東北地方の復興に貢献できないか」。また、BCP（事業継続計画）の代替工場の建設など、検討を重ねていた時期に、碧南市が塩竈市と災害時相互応援協定を締結し、視察のため佐藤昭塩竈市長が当社を訪れました。こうした経緯もあり塩竈市での新工場の建設が決まりました。

松島湾が一望できる新浜町の新工場には、直売店も併設し、マグロやホタテ、カキやワカメなど、三陸の食材を使った「できたて」のえびせんべいが楽しめます。



マグロやカキを使った新商品も発売されます



プロフィール

明治時代の愛知県が発祥地である「えびせんべい」。昭和57年に愛知県碧南市に設立されたスギ製菓株式会社では、その製造から販売までを一貫して行い、愛知県内に10店舗を展開しています。平成27年夏に操業開始を予定する新工場は、関東以北への供給拠点となります。



大型土産店として展開する「えびせんべい共和国」は人気の観光スポットです

ます。また、水産物仲卸市場にも近いので、塩竈市の新たな観光ルートになればと考えています。

自然豊かで漁業が盛んな塩竈市は、私たちが住む碧南市ととても似ています。それ、人がとても温かいですね。社長もよくそう話しています。塩竈という新たな地で、地域に必要とされる企業を目指したいですね。

子どもたちは、交換日記でつながっていた

浦戸第二小学校教諭 鎌田 実さん・事務 渡辺 慎二さん

3月11日の震災発生時は、予定されていた中学校の卒業式も終わり、すでに児童生徒全員が下校したところでした。一部の教員と児童生徒が市営汽船上で地震に遭いましたが、津波到達の前にマリンドックへ避難してしまいました。学校はすぐに避難所を開設し、島民の皆さん約100人が津波から避難しました。3日後、教職員は島に残った船で本土に戻り、塩竈市公民館本町分室を当面の職員室として、児童生徒たちの家庭訪問を重ねました。

避難によってばらばらになった子どもたち。そんな彼らをつないでいた一冊の交換日記が残っています。「こころちゃん」と眠れていますか？ かずとくん、今何がほしいですか？ あやなさん、



それぞれの避難所を校長が訪れ、一人ひとりに卒業証書や修了証書を手渡しました



交換日記。家庭訪問で先生が預かり、次の児童生徒へと手渡しました

ももかさん、ご飯は食べれていますか？ 中学生の皆さん元気ですか？ みんなが心配です」（3月28日、小学校3年本郷笙吾さん）。被災し、家を流された子どもたちが、日記を通じて仲間を気遣い励ましていました。その後、転校を余儀なくされた子どもたちもいますが、今も元気でそれぞれの道を歩んでいます。



プロフィール

塩釜港の沖合7.6キロメートルにある野々島。その高台にあるのが、浦戸第二小学校・浦戸中学校です。特認校制度によって、本土のさまざまな地域からも児童生徒が通っています。平成26年度の全校生徒数は34人です

数百年の伝統を守り伝え、奥州の復興を願う

志波彦神社鹽竈神社氏子青年会 会長 千田 忠一さん

氏子青年会には350人の会員がいます。震災で自宅を流された方や、津波に巻き込まれ何とか命だけは助かったという方など、さまざまな形で被災しました。幸いだったのは、会員全員が命は無事だったということです。神様のご加護があったのだと、皆で感謝申し上げます。

会員には塩竈市の職員も多いため、人手が足りないという情報や要請があれば、会員に声を掛けて支援に当たりました。また、震災発生から2週間は、氏子青年会の車両にポリタンク50本を積んで、給水車が入れない場所での給水活動に当たりました。

震災の年の4月、一日も早い復旧を願った「花まつり」が、7月には「塩竈みなと祭」が開催されました。「このよ



重さ1トンの神輿が202段の石段を上ります。震災後、「輿丁」を志す若者が増えています



プロフィール

鹽竈神社の祭典の中で、氏が始めたと言われる「帆手まつり」(3月)、「花まつり」(4月)、「塩竈みなと祭」(7月)の「氏子三祭」を執り行っています。神輿が塩竈の町を巡る「神輿渡御」では、氏子青年会が神輿を担ぐ「輿丁」の大役を果たします。2014年には「塩竈みなと祭」が「ふるさとイベント大賞」で内閣総理大臣賞を受賞し、官邸において表彰されました。帆手まつりは333年、花まつりは240年、みなと祭は67年の歴史があります(平成26年現在)。



平成23年4月に行われ「花まつり」。余震による津波の危険もあり、渡御は境内で厳かに行われました

うな時だからこそ、祭りが必要なのだ」という意見が大多数でした。塩竈の人々は、震災で落胆するのではなく、むしろ懸命に前に進むようになっていました。塩竈の人々は強い。そう感じました。私たちが伝統ある氏子三祭を絶やすことなく続けることで、塩竈の、そして奥州の復興が加速することを心から願っています。

地元の寺院が、宗派を超えて

臨濟宗妙心寺派 無量山願成寺住職 鈴木 宗博さん

東日本大震災では、願成寺の参道入口付近まで津波が押し寄せました。当寺院には近隣から70人ほどの方々が避難されました、そのまま一晚を過ごされました。激しい余震が続く中で、皆さんが努めて明るく振舞い、励まし合っていた姿が強く印象に残っています。

震災の翌日には、収容されたご遺体が葬儀社に次々と運び込まれ、その場に居合わせた誰もが「このままでは火葬が追いつかなくなる。なんとかせねば」という思いで一杯でした。「亡くなられた方が、少しでも早く安らげるようにせめて火葬だけでも」。多くの寺院が宗派を超えて集まり、自治体や葬儀社、そして火葬場の皆さんのそれぞれが、精一杯できる限りの力を出しきりました。そうして、

遺族の皆さんが見守る中で、ほとんどのご遺体を土葬ではなく火葬することができました。宗教、会社、自治体にとられることなく心が一つになったことに、人間の素晴らしさを感じました。携わった全ての方々に感謝すると共に、私たちの行動に理解を示し、支援を借しまなかつた塩竈市の対応に、私たちは今でも感謝申し上げます。



無量四諦龍は、水(海)の静穏を願う水神。チーソー彫刻家である城所ケイシ氏により境内に納められました



仏師である赤井鑄武氏から寄贈された菩薩像。震災で亡くなられた方々への供養を願い、心を込めて彫られました



プロフィール

願成寺はJR仙石線塩釜駅の東側の高台にあり、塩竈市の避難場所になっています。昭和7年に建造された本堂は、塩竈市に現存する唯一の木造寺院建築です。震災後は避難場所として十分な対応ができるよう、本堂の耐震補強工事や境内のバリアフリー化を行いました。